

● 論文入賞者とその上司に聞く

論文を書くだけでなく、多くの聴衆の前で発表する

東北インフォメーション・システムズ(株) [東北研] <http://www.toinx.co.jp/>

今年も「IBMユーザー論文」の募集が始まっています。昨年度(第49回)は127編の論文が提出され、数多くの事例研究の成果を会員の皆様からお寄せいただきました。その一方で、「目の前の仕事に追われて論文を書く余裕がない」「書くテーマが見つからない」といった声も聞かれます。そこで、第49回 IBMユーザー論文において、入賞論文(準入選)3編をはじめ数多くの論文を提出された東北インフォメーション・システムズ(株)様[東北研]におじゃまし、準入選論文執筆者とその上司の方に、論文への取り組み姿勢や執筆によって得られるもの、執筆のコツなどについてお話をお伺いしました。



〈執筆者〉
電力事業部
配電・資材システムグループ グループマネージャー

佐々木 美徳氏

1987年 東北インフォメーション・システムズ(株) 入社
システム経験年数 23年



〈上司〉
電力事業部
事務システムグループ グループマネージャー

鈴木 雅裕氏

——東北インフォメーション・システムズ様からは、毎回、数多くの論文を提出していただいています。会社として、論文執筆を推奨されているのでしょうか。

鈴木 研修制度に組み込まれていたり、業務命令で書いているということはありません。各自、「自分のやってきた仕事を客観的に見て整理する」という意識を持って仕事に取り組んでおり、その結果として論文を書いたのだと思います。

——佐々木さんは、前回のシンポジウム倉敷大会に向けての論文募集では、見事、執筆された論文で入賞(準入選)されました。その前の年にも提出されて、佳作に入っていますね。

鈴木 今回チャレンジすると、3年連続ですからね。なかなかできないと思いますよ。

佐々木 実は皆が集まった席で、アルコールが入ったせいか、今年もやると言っていました…(笑)。

——それでは期待して応募をお待ちしています。(笑)

佐々木 「自分のやってきた仕事を客観的に見て整理する」という話がありましたが、自分の経験を論文という形で残して、それを他の人が読んで、それをヒントにまた新たな発想が生まれるのなら、自分としても書いて良かったと思いますね。倉敷に行けるとか、福岡に行けるといった“ごほうび”的なものはおまけで付いてくるのかもしれませんが、やはり論文を書こうと思ひ、実際に執筆する数ヵ月の間、長期的にモチベーションを維持し続けるためには、「自分の書いたものを誰かが読んで共感してくれればいい」と思ってやらないとできないですね。

——今回、東北インフォメーション・システムズ様からは、3編が入賞されてシンポジウムの分科会で発表、2編が佳作としてポスター論文発表されました。この成果を、社内で発表される予定はあるのでしょうか。

ことが、貴重な経験になって成長につながります

鈴木 毎年、2回程度「技術報告会」を開き、論文の内容や研究成果を全社員向けに発表する機会を設けています。今年は10月末に開催する予定ですが、今回はユーザー論文の入賞者も多かったのも、協力会社の皆さんにも来ていただいて論文内容を聞いていただく予定です。

——それは楽しみですね。佐々木さんは、10月に開催される東北研の「論文書き方セミナー」の講師も務められると伺いました。それを聞かれた方が、論文を書こうという気になってもらえるといいですね。論文を書くということは、書いた方の成長につながるとお考えですか。

鈴木 ええ、佐々木と一緒にプロジェクトを手掛けたのがきっかけで今回の論文が生まれたのですが、彼はプロジェクトの技術責任者という重要な役割を担う一方で、忙しい中、時間を有効に使って執筆していました。論文を書き上げた時は、がっしりした身体が、さらにもう一回り大きく見えましたよ(笑)。時間を作るのは大変だったでしょうが、次の世代にノウハウを継承するという目標を明確に持っていましたので、うまくできたのではないかと思います。シンポジウム倉敷大会の会場で、他の会社の方が論文内容を発表するのを聞きましたが、論文を書くだけでなく多くの聴衆の前で発表するという事は、本人にとって貴重な経験になり、大きな成長につながるんだなと思いました。なかなか人前で発表するというチャンスはないですからね。しかも、初めてその内容に触れる方にも分かっているように説明するわけですから、いい経験になりますよ。若手の成長を考えると、論文執筆はいいチャンスになると思います。

——執筆する時のコツがありましたら教えてください。

鈴木 私も以前、ユーザー論文を書いた経験があるのですが、テーマは決まっているものの、書いてみると起承転結がおかしくなっていました。書き足していった結果、規定よりも長いものになってしまい、文字数を減らすのにとっても苦労しましたね。20数回書き直したことを覚えています。

佐々木 私も最初の時は、ずいぶん書くことに苦しみました。2回目はデータ集めと構想に2～3ヵ月くらい掛かりましたが、執筆は集中して書いたもので、1週間程度で書き上げることができました。前の年に苦労した経験が、ずいぶん生かされましたね。

書く時には、1つの文章はできるだけ短くすることを心

がけました。文章が長くなると、言いたいことがはっきり相手に伝わらないんですね。あと、文章は受動態にすると弱く、読んだ人は他人事に感じてしまいます。自信のない部分はどうしても受動態になりがちなんです。そこで振り返りを行ない、例えば「計画された」を「計画した」と、能動態にするようにしました。

——そういった努力が報われて、2回目の執筆で入賞論文に選ばれたわけですね。

佐々木 受賞の連絡が来た時は、うれしかったですね。でも、1次選考の発表があった後、3月11日に東日本大震災が起きました。私たちの会社は東北電力の関連会社のため、震災対応が最優先事項となり、実際にシンポジウムに行けるのか、ギリギリまで分かりませんでした。でも、たとえ行くことができなくても、発表資料だけはそろえておこうと準備はしておきました。結果としてはシンポジウムに参加することができ、発表うまくできたので、とてもいい経験になりました。

——では、来年も福岡でお会いできることを楽しみにしています。ありがとうございました。■

今回取り上げた論文の概要

第49回 IBMユーザー論文 準入選 設計書から複雑度と規模を定量化する手法の実践 【事例型論文】

本論文で紹介するプロジェクトは、機能数が2万ファンクションポイントを超え、当社でこれまで経験のない大きなプロジェクトであった。プログラム設計時点で開発するプログラムは2,700本を超えていた。本論文は、このプロジェクトにおいて、「設計ポイント指標」を利用したプログラミング工程の管理方法、プログラム設計書からプログラムの複雑度と規模を定量化する手法と、「設計ポイント指標」を評価した結果を述べる。

★この論文は、U研ホームページ「電子図書館」から閲覧・ダウンロードすることができます。(IDとパスワードが必要です)

論文を書くときのヒント！

◎論文ホームページ (<http://www.uken.or.jp/ronbun/>)
「論文作成に役立つヒント」と題して、「企業論文の書き方」セミナーの内容を、Webcastで動画配信しています。

◎e-ラーニング (<http://www.uken.or.jp/e-learning/index.shtml>)
「論文の書き方(基礎コース/上級パック)」を受講していただけます。受講料は無料です。